

私の紙面批評

弁護士

清源 万里子

若者と地域をつなぐ



(きよもと・まりこ) 1981年、中津市生まれ。2008年弁護士登録。11年大分県弁護士会入会。九州弁護士会連合会・犯罪被害者の支援に関する連絡協議会委員。現在、子育て真っ最中。

大分合同新聞創刊130周年を記念し、朝・夕刊でとつても意義がある。大分の展開した年間企画「青が咲く」が3月で終了した。この企画は、若く青々とした学生や若者たちに密着し、地域社会の課題や現状に触れながら、体験型の主権者教育を通して成長していく姿をルポ形式で連載した。地元の大分大学とこのとん地域密着」を企業理念津町を訪れ、熊本・大分地

は、学生にとつても社会にいた。学生たちが体験型。大分の連携授業を通して意識の変化を感じ、自分たちでできることを実践し始めた様子から、1年間の授業の成果がうかがえる。

「このままでよいのか」という焦り、将来への夢、社会に出る前の漠然とした不安…。自分の若い頃を思い出しつつ、若者たちを応援したい気持ちになった。

人口の「極集中を改善するとともに、地方の人口の維持・増加を図り、少子高齢化に歯止めをかけなくてはならない。そのためには雇用確保、子育て支援などの推進が欠かせないが、いづれも容易ではない。そのような中、若者が地域の問題に向き合い自分の意見を持つこと、社会が若者の不安を理解することは、若者と地方を「つなぐ」きっかけになるように思う。

今後大分合同新聞ならではの企画、「青が咲く」のような大分を元気にする記事を期待している。

とする大分合同新聞社との連携授業の開始に大分の地域づくりに対する期待を抱いたのは私だけではないだろう。少子高齢化が進む中、2016年夏から選挙権を手にした18歳、19歳の若者の意見はとつても重要だ。子どもの貧困など大分の抱えている課題に、地元の学生が真剣に向き合い、対策を

とつても意義がある。大分の展開した年間企画「青が咲く」が3月で終了した。この企画は、若く青々とした学生や若者たちに密着し、地域社会の課題や現状に触れながら、体験型の主権者教育を通して成長していく姿をルポ形式で連載した。地元の大分大学とこのとん地域密着」を企業理念津町を訪れ、熊本・大分地

は、学生にとつても社会にいた。学生たちが体験型。大分の連携授業を通して意識の変化を感じ、自分たちでできることを実践し始めた様子から、1年間の授業の成果がうかがえる。

「このままでよいのか」という焦り、将来への夢、社会に出る前の漠然とした不安…。自分の若い頃を思い出しつつ、若者たちを応援したい気持ちになった。

人口の「極集中を改善するとともに、地方の人口の維持・増加を図り、少子高齢化に歯止めをかけなくてはならない。そのためには雇用確保、子育て支援などの推進が欠かせないが、いづれも容易ではない。そのような中、若者が地域の問題に向き合い自分の意見を持つこと、社会が若者の不安を理解することは、若者と地方を「つなぐ」きっかけになるように思う。

今後大分合同新聞ならではの企画、「青が咲く」のような大分を元気にする記事を期待している。